

Title	川越修・姫岡とし子・原田一美・若原憲和編著 近代を生きる女たち： 一九世紀ドイツ社会史を読む
Sub Title	
Author	矢野, 久
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1992
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.84, No.4 (1992. 1) ,p.1065(323)- 1068(326)
JaLC DOI	10.14991/001.19920101-0323
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19920101-0323

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



川越 修・姫岡とし子・
原田一美・若原憲和編著

『近代を生きる女たち
——一九世紀ドイツ社会史を読む——』

（未来社，1990年）

本書を手にするときまず「編著」という表現に興味がそそられる。編者でも著者でもなく編著なのである。パラパラと頁をめくるとすぐその理由がわかる。研究文献、資料集、当時の出版物などから編著者たちが重要と判断した箇所を「翻訳」引用するという形式をとっているのである。若干の説明がなされてすぐに翻訳引用が数頁にわたってなされ、また若干の説明がなされる、という具合である。全体のうちどれだけが翻訳引用されているのか不明であるが、ともかく、当時の眼からみたドイツ女性の世界に入り込むことができたかと思うと、突然引用が中断あるいは終了して、若干の説明がなされる。この説明も必ずしも十分な頁数がさかれないため、舌足らずの印象をもたざるをえないが、時には非常に重要なことも主張している。しかし他面で、説明そのものが歴史研究で実証されているのか疑問と思われたり、あるいはそのように主張したくても、どのように実証すればいいのだろうかと思われることが、直截に主張されたりもしている。

こうした本書の形態上の問題はこれくらいにして、本書のテーマに移ろう。『近代を生きる女たち』——なんと魅力的なタイトルであろう。「近代を生きる女たち」の〈近代〉とは何なのだろう。編著者たちは〈近代〉で何をイメージしているのだろうか、興味をそそられる。サブタイトルには「一九世紀ドイツ社会史を読む」とある。彼らの〈近代〉とは19世紀であること

がまず明らかとなる。しかし〈ドイツ〉の19世紀を問題にしていることも同時に明らかだ。社会科学の書物か西洋経済史関係の書物を読んだことのある者なら、イギリスやフランスのいわゆる〈近代〉とは異なる〈ドイツの近代〉を扱っているのだと、想像がつくだろう。そこで興味は、編著者たちは〈ドイツの近代〉をどのように扱っているのだろうかというところに移る。

そしていよいよ本題にかかわる問題に出会う。19世紀という近代に生きる〈女たち〉の世界はどんなものだったのだろうか、それがまず最初に思い浮かぶ問題だろう。しかしすぐに、19世紀の〈近代ドイツ〉に生きる〈女たち〉の世界はどんなものだったのだろうか、それはいわゆる近代に生きる女たちとどう違うのだろうか、という疑問も同時に生ずる。編著者たちは必ずやこうした疑問に答えてくれるにちがいない、私はそんな期待をもって本書を手にした。

それにしても「社会史を読む」という表現は魅力的だ。経済史でもない、社会学でもない。「近代ドイツに生きる女たち」を〈社会史〉という観点から見ると、どんな新しい姿が読みとれるのだろうか。姫岡とし子氏の「序論」の表現を借りると、「結婚、出産・育児、家事労働、就業労働、教育などのライフコース上の諸問題からみた女性の日常生活の実態」（11頁）が、可視的に明らかにされるはずである。しかし編著者たちの意図は、これにとどまろうとはしない。むしろ彼らはこれまでの歴史学や歴史研究のあり方に対して批判的である。「女性史および日常生活史の視点から近代社会とは何かをあらためて問い直したい」（8頁）というのが本書の究極のねらいなのである。つまり、社会史のなかでも「女性史および日常生活史」の視点こそが編著者たちの方法論的立場なのである。

本書の立場はその二つの「フレームワーク」からおのずと明らかとなる。第一のフレームワークは「前近代」と「近代」の二項対立図式に対する批判であり、近代を「近代初期」と「近代後期」に二段階論的に区分するということで

ある。そして「近代家族」の「多様性」を強調し、とりわけ近代家族の「階層差」に注目する。近代初期には「市民層」と「労働者層」ないし「下層社会」の「二つの世界」に分かれていたのが、近代後期になるとこの二つの世界が接近しはじめるというのである。

第二のフレームワークは「ドイツ特有の道」と論と関係するもので、ドイツのゆがんだ近代化の道というヴェーラーや大塚史学のテーゼに批判的である。先に述べたようないわゆる近代>に対する<ドイツの近代>という発想自体が、どうもよくないらしい。「ドイツ特有の道」批判論というものではなさそうであるが、ヴェーラーなどが主張するいわゆる<社会構造史>、政治社会史的な考察方法に対して方法論的に批判的なのである。それでは、<女性の日常生活史>という視点からドイツ近代をみるということは、歴史学方法論的にはいったいどういうことになるのだろうか。大きく分けて二つの注目すべき論点が浮き彫りになる。第一は、イギリスやフランスと異なるドイツの特有の道ではなく、<近代>という共通性が重視されるということであり、第二は、社会の歴史的变化に対して積極的にかかわる民衆・女性の自律的要素が強調されるということである（12頁以下）。

本論はⅠ、Ⅱ、Ⅲの三つの章から構成される。第Ⅰ章「一九世紀ドイツにおける女性論」（川越修）では、まず『百科事典』の女性関連の項目が追跡され、時代が経るにつれ百科事典の記述が変化したことが示され、女たちの世界が19世紀に大きく変化したことが明らかとされる。さらに、三人の男性知識人の女性論が紹介される。フィヒテに代表される、男女の自然的性差にもとづく市民社会的家父長制論が、19世紀になるともはや維持されなくなり、一方で伝統社会に回帰する「全き家」の再興（リール）、他方で工業化時代における家庭経済を重視する現実主義的な方向（シュタイン）に分かれていく状況が展開される。

第Ⅱ章の対象時期は19世紀前半で、「工業が未発達で、商品経済も十分には浸透していなかった時期」である。本書によれば、「初期工業化の時代」ということであるが、この時期には階層差が大きく、二つの異なる世界、つまり市民層の女たちと下層社会に生きる女たちが存在した。姫岡氏はゲーテの生家の18世紀後半期の家政、ライプティヒ近郊の教会村の牧師の19世紀初頭の家政、女性解放運動の創始者オットー＝ペーターズの生家の19世紀前半の家政を紹介することによって、市民層においては19世紀前半には自家生産と自家加工を中心とする貯蔵経済が支配的で、市民層の女性は家族以外の労働力を使用し、その監督にも忙しく、勤勉であったと指摘する。夫は外で働き、妻はこうした家事労働を担うという性別役割分担が確立したのも19世紀前半の市民層においてであった。

それに対し若原氏担当の下層社会に生きる女たちは、こうした淑女の世界とは全く異なる世界に生きていた。当時の新聞、雑誌、小説などをもとに、売春婦、洗濯女・女中などの家事使用人の実態が明らかにされる。結婚に至る前あるいは結婚の外に生きる女たちが、たとえ結婚できたとしても、子育てと家計を支えるために働き続けなければならない状況が描かれる。19世紀前半においては下層民の女性は市民層よりはるかに強く自家生産に依存し、家政のやりくり、肉体的な家事労働、家庭外での肉体労働に関与していたのである。彼女たちは家族の外部とのつながりを持ち、伝統的文化を保持していたため、資本主義的商品経済の浸透に抵抗していたというのである。

第Ⅲ章では、原田一美氏が、市民層と労働者層に分けて19世紀後半・20世紀初頭の女性の日常生活を扱う。市民層の女たちは淑女という理想を求められ、「結婚」が人生の目標とされる。家事が貯蔵経済に代わり、消費のための労働という性格をもつようになり、それに応じて「遊惰」な生活が市民層のステイタス・シンボルとなる。中・下層の市民層の主婦は、体面を保つ

ために日常生活を切り詰めたり、こっそりと内職したりする様相が自伝を中心に示される。

一方、労働者層の女たちの叙述は、子供時代、娘時代、結婚、家事・子育て・労働とライフコースに従って叙述される。女性労働者あるいは女活動家の回想、工場監督官の報告、体験記、労働者家族の家計調査などを資料に、結局のところ、市民層の女たちとは異なり、労働者層の女たちは子供・娘時代のみならず、結婚してからも家計を補助するために働き続けなければならなかったということが明らかにされる。労働者層の女たちにとっては結婚はあこがれてはなかった。夫婦関係については労働運動活動家の二つの自伝が紹介されるが、一方はうまくいっているがもう一方は破綻寸前の夫婦である。前者が普通だったと原田氏は推測しているが、本当にそうだったのだろうか。そもそも活動家ではない普通の労働者の夫婦関係はどうだったのだろうか、という興味をもちながら読み進んでいったが、結局答えはなかった。

第Ⅲ章の最後の節『『二つの世界』の接近—第一次大戦後への展望—』で、これら二つの異なる世界が世紀転換期から接近しはじめるということが示される。この節も原田氏担当であるが、この接近開始の原因は、第一に、結婚すれば「女は家庭に」という市民層の女性像が労働者層とりわけ熟練労働者層にも浸透しはじめたということ、つまり、「専業主婦」が労働者層にも生まれはじめたということ、第二に、女性の事務員、商店員という新しい職業に市民層の娘がつくようになったということに求められている。こうして、市民層と下層ないし労働者層という二つの異なる世界の女たちは、徐々に接近しはじめたというのである。

本書のフレームワークにもどろう。本書の編著者たちは、19世紀前半と後半とで近代は初期と後期に大きく二分されるという考えに立脚している。前近代—近代という対立図式に対し、前近代—近代初期—近代後期という流れのなか

で近代を捉えようとしているのである。しかしこうした流れのなかでドイツ社会がどのように歴史的に変化したのかは、本書のテーマではないので明らかにされていないが、女たちの世界がこうした歴史的変化のなかでどのように変化したのかも示されていない。むしろ本書は、近代初期、近代後期それぞれの時代に生きる女たちが、階層によってどういう状態にあったのかを明らかにしただけなのである。そのこと自体、まずもって歓迎されるべきであろう。しかし編著者たちがそこからさらに一步前進して、これまでの歴史学のありようを批判しはじめるや、こうした「状態」の翻訳引用では読者は納得しないのである。

<ドイツの近代>ではなく、イギリス、フランス、ドイツなどに共通する<近代>とは結局何なのだろう。そしてその近代の<初期>と<後期>とは何であり、どのように前者から後者へと転換したのか。本書の編別構成に沿っていえば、第Ⅱ章と第Ⅲ章とを区分するものは何か、第Ⅱ章から第Ⅲ章へと歴史的に変化した原因は何か、という問題である。「急速な工業化／都市化」という表現がわずかに出てくる(177頁)が、結局本書は19世紀ドイツの工業化のプロセスの内実を無視あるいはそれとの関係を無視して、女たちの世界を描こうとしたところに問題があるのではないだろうか。

ドイツの工業化との関係を無視したがために、世紀転換期以降の二つの世界の接近の始まりについても、その原因は説得的であるとはいえない。労働者層における「専業主婦」の浸透の原因はいったい何だったのだろうか。市民層の娘が就労するようになるその動機は何だったのか。世紀転換期以降における労働者層の娘の就労働機は何だったのか、それは19世紀後半の過程でどのように変化したのか。編著者たちいうところの近代初期から近代後期への歴史的変化、近代後期のなかでそこから二つの世界が接近しはじめることになる歴史的変化とはいったい何が同じで何が異なるのか。こうした疑問に対する

答えは残念ながら見いだせない。編著者たちが「ドイツの工業化／近代化」ではなく「工業化／近代化」を問題にし、それとの関係でそこに生きる女たちを問題にしたかったというのは理解できる。読者もそれを期待したはずである。しかし実際には、＜ドイツの近代＞を超えて＜近代＞というものがいかなる意味で女たちの世界とかかわったのかについては明らかにされないままに終わっていると思われる。

もう一つの批判点は、「下層社会に生きる女たち」から「労働者層の女たち」への転換にかかわる問題である。19世紀前半の「下層社会に生きる女たち」の間には、伝統社会の文化に根ざす抵抗のエネルギーが存在していたとするならば、19世紀後半の労働者層の女たちにはもはやそうしたエネルギーはなくなってしまったのだろうか。生きるために働き続け、家族の外との結びつきを維持していた労働者層の女たち、とりわけ市民層に接近していかなかった中・下層の労働者層の女たちには、こうした19世紀前半の下層社会に生きた女たちのモラルや文化は受け継がれなかったのだろうか。それとも、世紀

転換期以降、熟練労働者層の女たちが市民層の価値を受容しはじめることによって、労働者層内部に分裂が生じたために、労働者層の女たちの伝統的な価値や文化は消滅してしまったのであろうか。前述した点と関連するが「下層社会に生きる女たち」から「労働者層の女たち」への歴史的变化の内実が、結局のところ明らかにされていないのではないだろうか。

こうした批判点にもかかわらず、評者は編著者たちの読者へのメッセージを大切にしたいと思う。編著者たちは私とはほぼ同じ世代の若き(?)ドイツ史家である。社会構造史的な政治社会史に対して日常生活史的観点から近代社会を捉え直したいという編著者たちの意欲が、彼らの研究の蓄積によって、より内実のある、新しいパースペクティブを伴う歴史学の形成として結実することを期待する。本書評は、編著者たちへの批判的ではあるが心をこめた声援とメッセージである。

矢野 久
(経済学部助教授)